

論文の概要および審査結果の要旨

氏名（本籍）	村田 真一（京都府）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第80号
学位授与の日付	平成27年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条第2項
学位論文題目	『八幡宇佐宮御託宣集』の中世 一字佐八幡神話言説の研究
論文審査委員	主査 斎藤 英喜（佛教大学教授） 副査 川内 教彰（佛教大学教授） 副査 小川 豊生（摂南大学教授）

〔1〕論文の概要

村田真一氏の博士請求論文『『八幡宇佐宮御託宣集』の中世一字佐八幡神話言説の研究』（以下、本論文）は、一三世紀末から一四世紀初頭に宇佐宮・神宮寺の学僧・神吽が編述した『八幡宇佐宮御託宣集』（以下『託宣集』）の信仰世界を読み解くことで、中世八幡信仰の一端を明らかにするものである。

八幡神は早くから「八幡大菩薩」の称号をもつことで、いわゆる「神仏習合史」の始発として注目されてきたカミである。そこで従来の研究の多くは、『託宣集』などのテキストを用いながら、古代における八幡信仰の復元、あるいは神仏習合の成立論に偏っていたが、本論文は『託宣集』が中世宇佐で作られたことの意味、すなわち中世という時代の八幡信仰の特質、その固有性を『託宣集』を通して明かにしようとするものである。

そこで重要となったのが、近年の「神仏習合」をめぐる研究動向である。近年では、「神仏習合」という概念自体が近代的なカミとホトケの二分法を前提としていたことへの反省が提示され、さらには「神仏習合」という枠組みを超えていく、中世の伊勢、叡山などを拠点として繰り広げられた「中世神道」への注目、そこで導かれた「中世神話」あるいは「中世神学」という視点が提示された。本論文はこれらの研究動向を踏まえることで、『託宣集』というテキストが作り出した八幡信仰の世界を明らかにするという問題が設定されたのである。

以上のような問題設定を第一部、第一章の「研究史と課題」で行ったうえ、続いて『託宣集』が編述されるまでの八幡信仰史の流れを追っていく。以下、目次を掲げ、論文の概要を述べる。

緒言

第一部 八幡神の変貌

第一章	研究史と課題	——	八幡信仰と『託宣集』の中世へ
第二章	『続日本紀』の八幡神	——	仏法と託宣の国家神話
第三章	『建立縁起』の八幡神	——	大菩薩と大帯姫の出現
第四章	『玉葉』の八幡神	——	黄金と宗廟の祭祀言説

第二部 『託宣集』の八幡神

第五章	託宣における成長	——	『託宣集』の託宣史
第六章	八幡神と釈迦	——	救済者の神話・論理・儀礼
第七章	修行の神、八幡神	——	御体と祭祀の神話／神学Ⅰ
第八章	本地幽玄の八幡神	——	御体と祭祀の神話／神学Ⅱ
第九章	『託宣集』の神吽	——	宗教実践者の複合的位相
結語			

まず第二章では奈良時代の「正史」とされ、「八幡神」が史料に登場する初出である『続日本紀』にスポットをあて、東大寺盧舎那仏建立に際して出現するところから、八幡神の神格が仏教によって作り出されたカミであること、また「託宣」の語彙そのものが八幡神固有のものとして使われることを明らかにした。とりわけ「神が発する言葉」として一般化される「託宣」の語が、『古事記』『日本書紀』にはなく、『続日本紀』のなかでも八幡神にのみ使われたことから、後の「仏教神」「託宣神」としての八幡神の神格の生成を暗示した。

続く第三章では、最古の宇佐宮縁起とされる『建立縁起』(九世紀末期から十一世紀初頭に成立)を取り上げ、ここで八幡神＝応神天皇同体説が唱えられたことを明らかにし、また「八幡大菩薩」の称号を、八幡神が「大菩薩」へと成長していく神話として読み解いた。さらに大帯姫の祭祀草創、また姫と同体化する辛島氏の女性祭祀者の姿を捉えて、祭祀者との相互関係のなかで八幡神の神格が更新され、成長していくことを論じた。

そして第四章では、九条兼実の日記『玉葉』中の治承・寿永の争乱のなかで宇佐宮の「黄金」が略奪された事件と、その黄金をめぐる「御体」か「神宝」か、という議論が起きた記事を取り上げた。そのなかで兼実が先例を踏まえつつ、黄金を「宗廟の靈宝」として捉えた点に注目し、黄金喪失の危機を媒介に、八幡神が「国家の宗廟神」へと、より強固な神格を獲得していく過程を明らかにした。

以上の第一部を受けて、第二部では『託宣集』そのものの解説に踏み込んでいく。

まず第五章では、『託宣集』の重要語句である「託宣」について取り上げ、さらに八幡神の託宣にたいして編述者の注釈が施されること、さらに注釈によって託宣そのものが変容していくことを明らかにした。「託宣」が変容することで、八幡神のカミとしてのレベルが上昇することを指摘し、後の章への伏線とした。

続く第六章では八幡神の本地説として語られる「阿弥陀本地説」をめぐる論及する。そのなかで八幡神が救済者としての阿弥陀と優劣が論述される記述に注目し、さらに鎮護国家の行いで「隼人征伐」という殺生をした八幡神が「九旬御入堂」の儀式で法華懺法を行っていることから、そこに八幡神の罪業を消除し、衆生救済の力を更新していく姿を見

てとった。護国神として殺生をすることと、衆生救済のカミとなることの矛盾を突破する方途が儀礼であったのである。

第七章、第八章は『託宣集』が作り上げた「神学」を論じる、本論文の核心となるパートである。まず七章では八幡神祭祀で使われる「藻枕」の起源を語る神話に、編述者・神吽が大神氏という祭祀氏族から「修行者」へと変容・成長していく様を見て、「修行」という営為のなかに八幡神と宗教者とが一体化する境地を捉えた。「修行するカミ」としての八幡神の特質を明らかにしたのである。

続く八章では八幡神の「御体」をめぐる注釈に現れる「本地幽玄」という表現に注目し、とくに「真空冥寂」「虚空同体」という記述によって、言語化できない八幡神の本質を捉える。さらにそれらの語彙が、中世伊勢の神道書『類聚神祇本源』や叡山の『溪嵐拾葉集』など宗教世界と共有することを明らかにして、「本地幽玄の神学」としての『託宣集』の中世信仰史上の位相を論じた。

そして最終章である第九章では、「本地幽玄の神学」の発生を捉えるために、編述者・神吽の神秘体験の領域にまで分け入り、またそれが「蒙古襲来」という東アジア的な危機の時代と呼応する「神秘体験」であることを論じ、『託宣集』というテキストそのものが作り出す「中世」という時代を描き出した。

以上から『託宣集』が八幡神の「神秘と真理」を実証する神典であることを示して、結論とした。

〔2〕審査結果の要旨

次に審査において示された、本論文の評価と問題点について述べる。

まずなによりも、これまで真正面から論じられ、解説されてこなかった『託宣集』の記述に分け入り、そこから中世の八幡信仰の独特な姿を明らかにしたことは大きな成果といえるだろう。とりわけ『託宣集』をめぐる数少ない先行研究である園田香融氏による天台の本覚思想との関係、桜井好朗氏による「修行する神、八幡神」の視点、「中世」的な渾沌や矛盾の意味するところを踏まえつつ、それを発展させ、展開させたことに、本論文の意義がある。

それを可能としたのは、近年の中世神仏習合史、中世神道史研究の最新動向を村田氏が的確におさえ、その問題のなかに踏み込んでいったことにある。とりわけ佐藤弘夫氏、山本ひろ子氏、さらに小川豊生氏による中世神道から中世神話、さらに中世神学をめぐる研究成果、方法論を自身のものとして血肉化することで、『託宣集』の記述や信仰世界が、伊勢神道や叡山の山王神道との繋がりをもつこと、それが「蒙古襲来」以降の時代的な危機を共有するものであることを論じたところ、また「神学」の生成が、伊勢などと同じように、宗教者の神秘体験にもとづくことを究明したことは、大いに評価されるであろう。

八幡神は、当初から固定した神格ではなく、修行することで、自らの神格を高めていくという特異なカミであること、それを導くのは修行者としての宗教者との合一にあったという位相を明らかにしたのである。かくして本論文の出現によって、中世神道研究の一角に「本地幽玄の神学」を語る『託宣集』が重要なテキストとして位置づけられることは間違いないだろう。

そうした意義をもつ本論文であるが、『託宣集』の中世的な広がり論じていくうえでは、さらに次のような視点が必要であることが指摘された。

まずなによりも中世仏教の理解がいまだ充分とはいえないこと、たとえば『託宣集』のなかにある「釈迦菩薩」という用語は釈迦を「菩薩」と捉えることで、修行者としての八幡神を論じるにあたって、ひじょうに興味深いものだが、その点について本論文では触れていない。また神々の神秘体験を語るときに出てくる「道心」は、仏教とりわけ浄土教が発展していくうえで重要な概念である。そこには神の「託宣」を受けることが、仏道修行における「心」の在り様を重視する中世仏教の特色と呼応することが見える。それらの点は、中世仏教の思想動向のなかに『託宣集』を位置づけていく可能性を見せるが、本論文では、そうした論点が不充分であったように思われる。

また『託宣集』は「託宣」が喪失していく状況のなかで編述されたと編述者の神々は語るが、たとえば『比良山古人霊託』など「霊託」という形、とくにカミとの問答を行う宗教実践が中世には現れてくるが、それと一方的にカミの託宣を聞くという『託宣集』との違いを比較する視点がほしかったことなど、『託宣集』の固有性を明らかにするうえでの、他の中世の信仰世界やテキストとの関係性、またより中世仏教の思想動向への広がり、すなわち本論文の研究視点を今後、いかに広げていくのかをめぐる問題が指摘された。

また本論文の方法論に関しては、中世神話、中世神学とともに「神話言説」というタームを用いたが、それが具体的なテキストの解説に際しては生かされきれていないことも指摘された。

以上、本論文の評価されるべき意義と問題点を述べたが、これらの問題の指摘は、『託宣集』というテキストそのものに肉薄し、それを「中世神学」の世界と読み解いた本論文の研究成果があつて、初めて見えてきたことでもある。本論文以前には、『託宣集』を、中世神道(中世神学)をめぐる近年の研究動向のうゑに位置づける研究は皆無であつたからだ。それは推し進めたことは、村田氏の今後の研究者としての可能性を示してくれるものと思われる。

以上の点から、本論文を、博士(文学)を授与するにふさわしい論文として認めるものである。